

どのような型の肥育を選ぶべきか

和牛試験場 嘉 寿 頼 栄

最近各地で、いろいろな型の肥育が行なわれるようになりましたが、どのような型の肥育が有利かについて、立地条件などを考慮に入れて考えて見たいと思います。

大体別掲模式図のように分類されますが、これらを岡山県で行なう場合を考えて型態別に説明して見ましょう。

① 理想肥育（長期肥育） この肥育は肥育の経験をかなり積んだ人で、特上肉等の販売ルートのあるものでなければなりません。（この意味では老舗を誇る三重県、滋賀県などにはかないませんから、岡山県としては大きく取り扱うべき型の肥育とは言えません。）また素牛は相当優れたものでなくてはなりません。元来岡山産牛は但馬牛に比べ資質は幾分劣りますが助張りがよく、飼い易い点で優れてはいますが、この型の肥育には但馬牛が最もいいとされています。岡山県では精々10カ月から1年まで位の肥育期間でよいと思います。県内では倉敷、岡山、瀬戸近郊でこれに近い形の肥育が行なわれています。肉牛の共進会などに出品するものは大体この型態にはいりましょう。

② 普通肥育（中期肥育） 素牛としては2～3産したものでよいのですが仲々このような牛が市場には出て来ず、主に未経産のものが使われます。1～2産して見て仔出しの悪い場合は種牛として転売するより、この形の肥育をして出した方が有利で、後牛の購入資金にも充当されて、適切だと思われま

す。

③ 老廃肥育（短期肥育） この型は謂わゆる生産地などで老令のため廃用する場合、そのまま売れば安いですが、これを短期の肥育を行なって売れば有利な訳です。この場合はあくまで短期の3カ月位で仕上げるのですが、離乳直後で余り痩せているものは一応草等でもどし、それから本格的肥育を行なうことです。老牛は肥える能力が減退していますから、慾を出して、長く飼って肥やそうとしても、飼料の効率が下り、また肉牛として上等のものに仕上が

りませんから、とにかく飼い直し程度の気持で、本格的な肥育という観念を捨てて、短期間に仕上げることです。

④ 幼令肥育 仔牛の生産地で草を主体として、育成肥育するという型で、近年方々で行なわれていますが、昨今のように仔牛が高ければ思惑どおりの儲けがむつかしくなってきました。せり市で概が1kg当320円（100匁当120文）以上するような場合は引き合わないでしょう。今日このごろは加工肉材料としては大体125文位まででないとい採算が合わないと云われています。この型のものは、加工肉用として売るより、かえって素牛として売った方が有利のようです。

⑤ 若令肥育 最近肥育牛は年々若令化し、今後はこの形の肥育が多くなって来るでしょう。このことは、和牛が少しでも早く肉として仕上がって、経済性の高いものとなる意味合いからも当然の成行きです。せり市等で買った生後5、6カ月の去勢牛を、いきなり肥育しても牛が丸くなるばかりで大きくなりませんので、10カ月間位は草等で体高と肋張りを良くし、最後の4、5カ月で本格的肥育をやった方が有利です。出荷時の月令も大体18カ月位からがよいと云われていますが、実際は22カ月或は24カ月位たたないと肉色が淡くて、精肉用に不向きなため、肉商が高く買いません。このようにするには肥育期間は延ばさず、育成期間を延ばせばよい訳です。この肥育の型が本県としては最も普遍的かつ有利なものとして特に力を入れて奨励されています。

⑥ 壮令肥育 本県の場合は、この型の素牛は県南部の田揚り牛が可成り出るのでよく行なわれている形態です。最近素牛高で痩せている牛を買った場合は予備飼育期間を長くにとって、良質の粗飼料で或程度栄養をもどした後、本格的肥育に取りかかる方が有利です。

岡山県としては、県南都市近郊で長期又は中期の雌の肥育や去勢牛の壮令肥育が考えられます。県中

岡山畜産便り 1960.10

部の以前からの育成地帯では雌の中期、去勢の若令か、壮令肥育が考えられましよう。又市場の近い処では若令肥育素牛の育成もよいでしょう。

県北山間の仔牛の生産地では老廃の雌の肥育か、幼令肥育、若令肥育素牛の育成等が肥育の型としては適しているようにも考えられます。いずれにしても肥育の場合、生産費の半ばを占める飼料費について、自給飼料が何割かはありますが、特に良質粗飼料の導入等の多少によって収入が左右されるので、

飼料自給の問題が極めて大事でしょう。昨年あたりからの肥育試験のテーマもこのような粗飼料多給による試験を当场ではとり上げて行なっています。そのためには良質の青刈の飼料作物、特に荳科の飼料作物の栽培が大切です。

県全体から云って、北部、中部で素牛を育成し、中南部の肥育組合に直結した一環せる肥育の形態が行なわれるようになれば理想でありましよう。

和牛の肥育の型態的分類

